

# 日中科学技術

No. 197  
2026. 6. 20

発行所 一般社団法人 日中科学技術交流協会

〒103-0003 東京都中央区日本橋横山町 3-1 横山町ダイカンプラザ 302 号

E-mail : [jcstea2019@gmail.com](mailto:jcstea2019@gmail.com) [secretariat@jcstea.jp](mailto:secretariat@jcstea.jp) URL : <https://jcst.in.coocan.jp>

電話 : 03 (3666) 6939 携帯 090-7629-6260

Fax : 03 (3666) 6939

## 日中科学技術交流への郭沫若初代中国科学院院長の想い - 日中国交回復を祝し、沁園春の詞牌に心を込めて謳う 日中科学技術交流協会理事 坂田文彦 2026 年6月20日講演

### 日本生化学会の重鎮香川靖雄さんとの出会い



1882年生まれの母方の祖父柿内三郎は幼いころ病弱で、13歳の時に重いチフスに罹り、その病気を克服しようと医師を志しました。一高、東京帝大医科へと進みましたが、「当時の医学でお治療法

が不明」だったので、化学の方法で解明しようと、医科卒業後に東京帝大理科大学化学科に進み、物理化学を習得。化学科卒業後に東京帝大医学部生化学講師、翌々年に助教として東京帝大医学部生化学教室の初代教授隈川宗雄博士を補佐。1915年米国留学を経て、1918年より同大教授。日本生化学会を1925年に創設。その最後のお弟子さんである自治医大名誉教授、日本栄養大学副学長香川靖雄さんに、私10年晩秋に初めてお目に掛かる機会を得ました。一方、私が常任理事を務めています公益財団法人倶進会は、「薫育事業を通じて国家に有用な人材を養成する」事を目的として、退官後の柿内三郎により1943年に設立されました。しかし現在の財団理事の平均年齢は80代半ばを過ぎ、若い私も82才に近付いています。従って今のうちに、公益社団法人日本生化学会に倶進会を移管したいと考え、日本生化学会の重鎮香川靖雄さんをお訪ねした次第で

す。この時先生は、人材育成のために助成事業、表彰事業、セミナー事業を行ってきた倶進会の活動を高く評価して下さい、近年優れた研究が減りつつある日本の現状を、文科省科学技術・学術政策研究所の分析による”注目論文数ランキング”を示しながら、2019-2021年には中国、米国、英国、ドイツ、イタリア、オーストラリア、インド、カナダ、フランス、スペイン、韓国、イランに次いで13番目に転落した日本の現状を憂い、人材育成の大切さを強調されました。更に世界的に注目される研究成果が何処で生まれているかに世界は注目しており、先生の自治医大の研究室の評価や、中国の状況、中国との共同研究などについて話して下さいました。

### 中国科学院初代院長郭沫若さんの沁園春の詩との出会い

私の当初の目的は、公益財団法人倶進会の移管の件でしたので、それが軌道に乗り始めた3月になって、お礼の為に香川靖雄さんを坂戸のキャンパスに再び訪ねました。その時私は、前会長の有山正孝さんから日中科学技術交流協会の理事を仰せ付かってから、私にしか出来ない事をしたいと常々考えてきたので、香川靖雄さんの中国との研究交流についてのお話を伺い、何かの取っ掛りを掴みたいとも思っていました。香川さんは長年中国の大学、研究所との交流をお持ちでした。なかでも、1978年8月中国科学院の招待で、中華医学会の研究者に、研究の最前線の講演をされました。それは香川さんと研究上で関係が深く、自治医大にしばらく滞在了たこともあるPeter Mitchell博士に1978年度ノーベル化学賞を

2026（令和8）年6月20日授与するとのノーベル委員会の発表があった2ヵ月前の事であり、中国科学院が既に世界的に注目される研究に対して、いかに広いアンテナを張っていたかを示していました。このとき、香川さんは中国科学院から、ミトコンドリア膜・葉緑体膜・細菌形質膜を含む生体膜の構造と機能、生体膜構成要素(膜タンパク質と脂質)の相互作用、および生体膜研究手法に関する問題点、ATP合成酵素の研究などについての講演を依頼されたのですが、それはPeter

年9月の日中国交回復の報に接した喜びを謳った墨蹟を、主催者からお返しに贈られた香川さんは、それを日本に持ち帰られました。その後、自治医大を訪れた中国の生化学者から『これは文物なので大事に保管してください』と言われたそうで、現在は坂戸の日本栄養大学で大切に保管されているとのことでした。



図1 中華医学会での講演



図3 中国栄養学会主催国際会議での講演

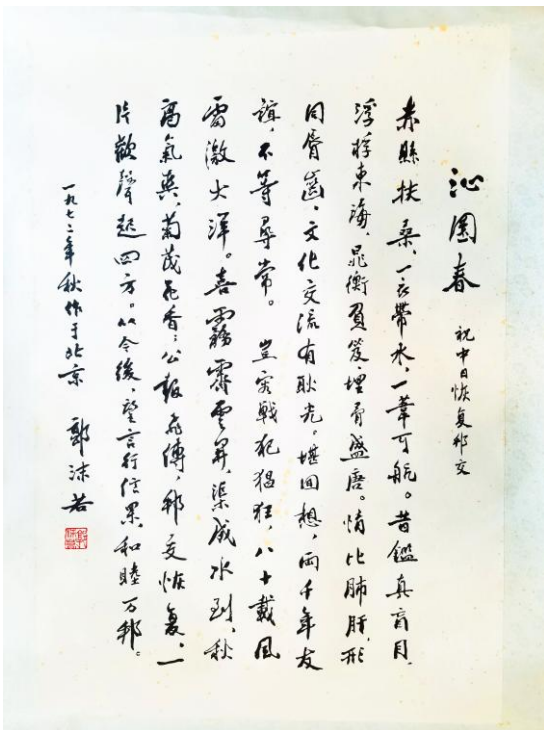


図2 郭沫若の沁園春の詩



図4 松柏傳記にて孫文と宋慶齡

Mitchell博士のノーベル賞授賞理由と一致していました。そのとき郭沫若中国科学院初代院長が1972

香川靖雄さんは、高齢にもかかわらず、2019年には南京で開催された中国栄養学会主催の国際会議で招待講演を行うなど、活発な研究生活を送っておられます。余談ですが、女子栄養大学の駒込キャンパスは、戦前から女子栄養学園と香川さんの自宅があった場所で、そこが田中昂(たかし)邸だったころは、辛亥革命の後に日本に亡命中の孫文を匿った由緒ある場所であり、写真の中央前列に孫文が子供の頃の廖承志さん(中日友好協会の会長を設立時から生涯続け、又郭沫若院長は同協会の初代名誉会長)を抱いているのが写っています。これも香川靖雄さんを中国と結び付ける縁のように思われます。

郭沫若初代科学院院長が沁園春の詞牌で

詠じた詩

私は当初、この書跡に献辞が書かれていなかった事と、詩の題名が「中日外交恢復を祝して」となっている点をはっきりさせたいと思い、中国社会科学院郭沫若紀念館の前館長で、郭沫若さんの末娘で私より少し若い、旧知の郭平英さんに電子メールで問い合わせました。彼女からの返信によれば、この詩は1972年10月に書かれ、1973年1月号の日本語版『人民中国』に掲載されたもので、そのために特別

に書かれた詩と推測されるとの事でした。更に続けて、「1970年代、父は日中友好を促進するため、数十篇の詩を創作しました。この『沁園春：日中外交關係恢復を祝う』は、父自身も大変満足していた作品だったと思われます。父はこの詩を書き写し、成方吾氏（父の旧友で、若い頃に日本に留学し、父と共に文学グループ「創成会」を共同設立した人物）に贈呈しました。」と書かれていました

沁園の春 國と日本とが國交を回復したことを祝って  
 中国と日本とは、  
 一衣帯水の關係で、  
 小さな船でも往来できる。  
 その昔 鑑真は苦難のために失明したが、  
 東海（東シナ海）にいかだのような船を浮かべて日本に渡り、  
 阿倍仲麻呂（唐名、風衡）は學識を深めようと唐に渡り、  
 ついには唐土で一生活を終えた。  
 互いのまごころを示しあい、  
 深い繋がりを結びながら、  
 交流を重ねた文化のすばらしさを、  
 心算しく思いを馳せるのは、  
 中国と日本という二つの國の間で千年も続いた友情が、  
 世間一般のそれとは比べることができないほどの美さだとい  
 うこと。  
 戦争犯罪者たちの狂気に満ちたでたらめな行いを問い詰める  
 つもりはない。  
 八十年も風と雲とが兩國間に横たわる大海でぶつかり合っ  
 いたのだから。  
 今はただ喜びたい。兩國の間を掩っていた霧や雲も晴れ渡り、  
 兩國をつなぐ水路は完成して水も通い始め、  
 秋の空はどこまでも高く清らかな気が盛んに湧き起り、  
 菊は見事に生長して花の香りが満ち溢れていることを、  
 正式の知らせが飛び込んできたのだ、  
 國交が回復したのだと、  
 喜びの声があらちから上がっている。  
 今よりあと、  
 望むことは言葉と行動で信頼を積み重ね、  
 世界中の國々と平和に仲むつまじく交流してゆくことだ、  
 一九七二年の秋 北京で作った 郭沫若

図5 郭沫若の詩の日本語訳

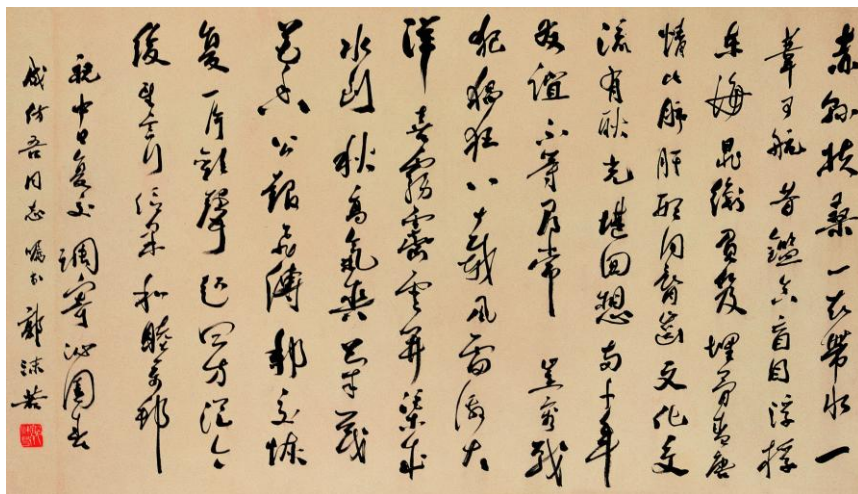


図6 郭沫若の友人成方吾に贈った詩

郭沫若院長の達筆の漢字は、私には何が書かれて

いるのか良く判らないので、藤田梨那さん(国士館大

学文学部教授郭沫若と佐藤をとみの孫に読んで頂きました。

沁園春 中日恢復邦交赤縣扶桑、一衣帶水、一葦可航昔鑑真盲目、浮桴東海、晁衡負笈、埋骨盛唐。情比肝、形同唇齒、文化交流有耿光。堪回想、兩千年友誼、不等尋常。豈容戰亂猖狂八十載風雷激大洋、喜霧霧雲開、渠成水到、秋高氣爽、菊茂花香。公報飛傳、邦交恢復、一片歡聲起四方。從今後、望言行信果、和睦萬邦。

また「沁園春」が意味することも、日本ではあまり一般的ではないので、少し解説すれば、沁園春は詞牌の一つで、その名は東漢の明帝の娘沁水公女の庭園沁園に由来する、とのこと。詞牌(しはい)とは、全体の句数、文字数、押韻、平仄(声調の上げ下げ)のルールが厳密に決められたもの。押韻

(おういん)とは、詩や文章において、同一または類似の音(母音や韻)を一定の箇所を繰り返し配置する技法。一般的に韻(いん)を踏むとも呼ばれ、リズム感を生み出して音の響きを美しく整える効果がある。平仄(ひょうそく)とは、漢字における漢字の音の高低(メロディー)やリズムの起伏規則のこと。

沁園春は、厳格な韻律と壮大なスケールを誇る代表的な詞牌と言われています。しかし、郭沫若院長の日本3語訳を読むだけでも、日清戦争以降の80年間続いた不幸な両国関係の狭間で苦難の人生を過ごし、日中の国交回復のニュースに接して、お互いに誠意を示し合って千年以上も続けてきた日中の文化交流を、再び続けてゆけることを喜び、その素晴らしさを謳いあげた郭沫若院長のこの作品に感動して頂けると思います。

## 日中連携による自然共生型水環境修復技術の開発

技術士(建設, 上下水道)、環境カウンセラー、日本工学会 Academician、温州大国際水資源・水域生態研究センター(生環学院-京都大防災研) 特聘教授  
協会正会員 井芹寧 6月20日講演

### 1 はじめに



私は、2017年に日本の建設環境コンサルタント企業を退職後、中国浙江省温州大学における京都大学防災研究所と共同設立の国際水資源・水域生態研究センター他の特聘教授

として日中の技術・人材交流に尽力している。

これまで、日中関係では、水域生態研究に関する大学間研究センター設立2件、日中国際プロジェクト創出3件、延べ数十人にわたる研究者と学生の相互訪問・交流・両国学会発表の助成を実施してきた。

このたび、日中協同により創出された社会実装可能な成果として、第7回社員総会において「日中連携による自然共生型水環境修復技術の開発:Nature Based Solution for Eutrophication Problem」の題目で講演を行った。その概要を以下に記す。

### 2 研究の背景

近年、世界各地の閉鎖性水域において、表層水の高水温化や富栄養化の進行に伴いシアノバクテリアの*Microcystis*の異常増殖、いわゆるアオコの発生が頻発化している。アオコの発生は、発がんプロモーターとして知られるmicrocystinや、アルツハイマー病などの神経変性疾患との関連が指摘されているβ-N-methylamino-L-alanine(BMAA)等の産生を伴い、経口吸引後人や動物の健康に悪影響を及ぼす。また、アオコは住民や観光客の憩いレクリエーションの場である湖沼沿岸域に集積し、景観の悪化、悪臭の発生、魚類等のへい死等を引き起こし、水辺環境の親水性を低下させることから、生活環境にも影響し社会問題化している。特に、アオコの主要原因となるシアノバクテリアの*Microcystis*は他の藻類と比較して高温域を最適増殖域としていることから、今後の地球温暖化による水温上昇で、さらなる発生域の拡大が懸念される。

今日まで、負荷量削減、回収、水循環、

殺藻剤散布、魚類捕食、植生帯造成、浚渫及び覆砂等数々の対策が行われてきたが、社会制度、施設建造管理の手間費用及び二次的環境影響等の問題があり、経済的で効果の持続性に優れ、且つ、環境にも優しい新手法の開発が望まれている。

### 3 竹と*Microcystis*攻撃型土着珪藻の活用

筆者らの既往研究において滑走運動型*Nitzschia*属の珪藻が*Microcystis*コロニーに取り付き、物理的にコロニー構造の破壊を促進する作用を有すること<sup>1)</sup>（図1）、また、青色光が*Nitzschia*の優占的増殖を促進することを明らかにした<sup>2)</sup>。さらに、天然資材である竹が、珪藻の付着担体として機能し、竹抽出液が*Nitzschia*の増殖を促進する一方、*Microcystis*の増殖を抑制する効果があることを室内実験により確認した<sup>3)</sup>。

*Nitzschia*は世界各地に広く分布する珪藻である。このことは本属珪藻を利用したアオコ制御Bio-manipulationにおいて土着種活用により外来遺伝子汚染を回避した形での対応を可能とする。

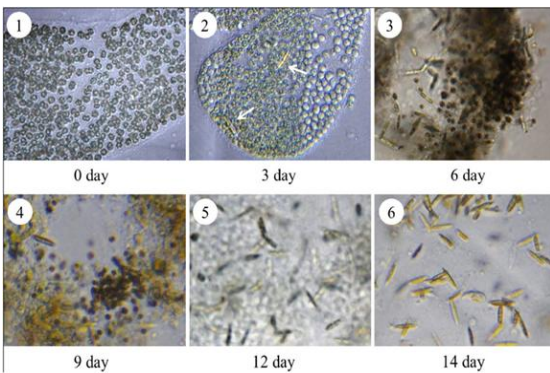


図1 *Nitzschia* によるアオコ colony 分解

### 4 アオコ調理船による生態食物連鎖改善

中国太湖に25,000m<sup>2</sup>及び250m<sup>2</sup>のメソコズム(生態系区画)を造成し、アオコ群体物理分散調理による水質、生物相に対する影響評価を実施した。*Microcystis*が有する動物プランクトンからの捕食圧、細菌類からの分解圧を妨げる細胞群体化機能と群体周囲のSheath-shield機能を無力化するため、調理区画において噴射衝撃による物理的分散化加工を行った。

細胞群体を分散化した調理水は、元のアオコ発生水域に還元放流される。本法は、

薬品化学反応や濾過工程を取らないことで大量処理を可能としている。

太湖における効果検証実験の結果、調理区において対照区と比較してアオコ発生が抑制され、栄養塩や藍藻毒の濃度低下が認められた。また、植物プランクトン優占種が、*Microcystis*を含む藍藻類から、動物類の良好な餌となる珪藻類、緑藻類へ変換され、食物連鎖で上位消費者となる、エビ、貝類の生産量の増加が観察された(図-2)。

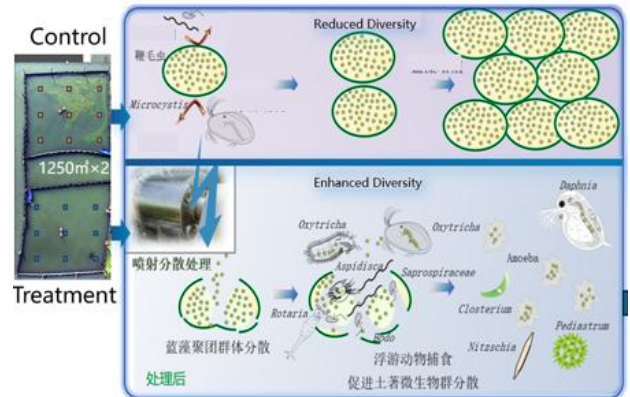


図2 噴射衝撃調理後の分解、消費者多様化

### 5 水域生態系と人のWell-Beingを導く自然共生システムを目指して

日中協同研究プロジェクトに基づく社会実装成果として、2026年に中国においてアオコ噴射分散調理船が実用船として完成した(図-3)。

現在は最終目標である自動制御システムの実現に向けて、アオコ分布データを取得する水上・水中ドローンおよびアオコ発生予測Ai制御モデルと連携した自動航行型システムへの高度化を進めている(図-4)。

また、日中両国の企業との連携のもと、竹材、青色LED、およびアオコ調理システムを統合した「青光供給竹生態礁」による生態系修復の実証試験が、日本と中国の両国において並行してスタートした。今後は、これら二つのプロジェクトの研究成果を基盤として、水域生態系修復がもたらす生態系サービスの定量的評価を実施する。

具体的には、漁業資源の回復や、真珠生産をはじめとする水産生物利用産業の復興への貢献度を評価するとともに、人の健康維持・増進に対する医学的効果についても検討する計画である。

アオコは自然の食物連鎖に乗せることさえできれば、富栄養化障害を引き起こす問題生物から変換され、過剰な無機栄養塩を吸収浄化する一次生産者として、且つ、健康的な生態系を支える物質循環の基盤として機能する可能性が期待できる。

本仮説の検証を目的として、水環境学、生態学、微生物学、水産学、医学および情報科学など多分野にわたる国際的な若手研究者・技術者ネットワークを構築し国際産官学連携の研究開発を推進していきたい。



図3 アオコ調理実用船 (第三世代)  
日中共同建造船として日本での貢献を目指す

参考文献：

- 1) <https://www.sciencedirect.com/science/article/abs/pii/S0925857420304158?via%3Dihub>
- 2) <https://www.mdpi.com/2073-4441/14/15/2310>
- 3) <https://www.nature.com/articles/s41598-022-05506-2>

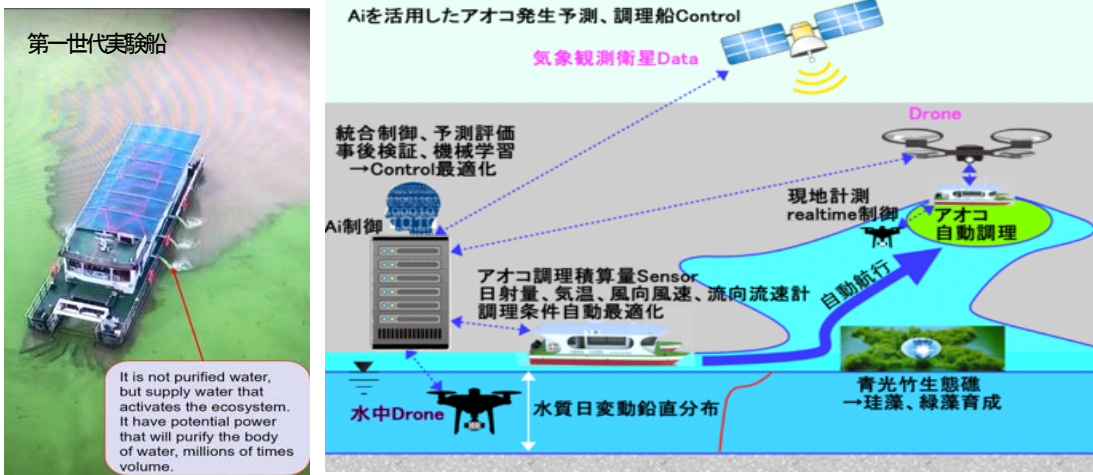


図-4 アオコ発生域予測アオコ調理船航行・調理自動制御システム

## 坂部知平先生を偲んで

前協会会長 有山正孝



当協会の設立初期から長く会員として積極的に活動し多大の貢献をされた坂部知平 (さかべ のりよし) 先生は、2025年10月9日に逝去されました。享年91歳であられました。

坂部先生は1934年、中国大連でお生まれこ

なり、11歳の時に同地で第2次大戦の敗戦を迎えられ、ソ連軍占領下で厳しい数年を過ごされた後、1948年7月、お父上の本籍地であった愛知県に引き揚げられました。物心つくころから多感な少年期に至るまでの時期を時代の激流に翻弄された大連で多くの中国の知人・友人と交流を重ねつつ過ごされたご体験が、その後、生涯にわたって日中交流に捧げられた先生の熱意の原動力であったと拝察されます。先生の大連でのご体験は会報 No.158 (2016.9.20) pp.2-12の「大連の思い出—引き揚げまでの体験記—」に

ご自身で詳しく綴られています。

日本に引き揚げられたご一家は、引き揚げ者の例に洩れず経済的に大変なご苦労をされ、先生ご自身も高校卒業後はペンキ塗装工までなされたということですが、そのような状況にも挫けることなく、愛知学芸大学（現愛知教育大学）・名古屋大学・同大学院に学び、天然物有機化学を専攻されました。

大学院修了後、名古屋大学にポストを得られた先生は、愛知学芸大時代に知り合われ、生涯の伴侶にして研究のパートナーともなられた貴和子夫人とともに X 線による蛋白質の結晶構造解析に挑戦され、これが先生のライフワークとなりました。最初に取り上げられたインスリンの構造の研究は、先生のグループの他に Oxford 大学の Dorothy C. Hodgkin 教授のグループ、北京の中国科学院生物物理学研究所の梁棟材教授のグループも取り組んでいました。先生はその研究成果を 1972 年に京都で開催された国際結晶学会で発表されましたが、その際こと面識を得られたことが契機となり、貴和子夫人と共に 1973 年から 2 年間 Oxford 大学に留学され、それまでの研究を完成されました。また科学の研究を進める姿勢について、Hodgkin 教授から多くを学ばれたとのことでした。ご帰国後、当協会を通じて北京の梁教授と連絡、1978 年・1979 年には梁教授の招待を受けて北京を訪問し、研究交流を深められました。その詳細は先生が会報 No.39 (1984) に報告しておいでになります。

1985 年、先生は名古屋大学から高エネルギー物理学研究所（現高エネルギー加速器研究機構、以下 KEK）放射光実験施設（Photon Factory (以下 PF)、1978 年設置）に移ってビームラインの開発に携わられました。特に 1987 年に立ち上げられたビームライン BL-6A2 は、ご自身で開発された巨大分子用ワイセンバグカメラを備え、当時世界最高性能の蛋白質 X 線結晶構造解析のビームラインとして諸外国のトップレベルの研究者たちに挙って利用され、多くの成果を生みました。この業績に対して先生は 1993 年、第 5 回つくば賞を受賞されました。共同利用研究所である PF は常に外部から多数のユーザーを受け入れています。先生は常に献身的に対応されたので、多くのユーザーから感謝され、国際的な研究交流に多大の寄与をされたのでした。

先生は 1993 年 KEK を定年ご退官の後、公益財団法人国際科学技術振興財団主席研究員として筑波大学生存ダイナミクス研究センター（TARA センター）を拠点に、蛋白質の構造解析を根幹とする構造生物学の発展に寄与され、PF のビームラインに更に BL-18B、BL-6B、BL-6C を加えて居られます。

またこの間に先生は総合研究大学院大学教授、筑波大学応用生物化学系教授を併任され、後継者の育成にも力を注がれました。

KEK が広報活動の一環として配信しているニュースレターに「KEK の人」という連載記事があって、その No.37 (2018 年 10 月) に坂部先生のインタビューが掲載されています。その中で先生は『「生涯第一線の研究者でありたい」というのが私たち夫婦の信念です』と語っておいでになります。そのお言葉の通り、近年まで土日休日も研究室で装置の開発や実験に没頭しておいでになったようで、それは会報 No. 185 (2023) に寄稿された故安藤正海先生（協会会員）の自傳記事からも推察されます。更に 2024 年 9 月に開催された第 3 回 PF 同窓会では、ご高齢にも関わらず「放射光と私」と題して確りしたお声で講演されたということです。しかし 2023 年 10 月 2 日、貴和子夫人が急性心不全で急逝され、その後はお寂しい日々を過ごしておいでであったことと拝察申し上げます。先生ご自身も数年前に心臓を患い手術を受けられたと伺っておりましたが、予後は順調でお元氣にお過ごしと思っておりましたので、この度のご逝去の報にただただ驚き悲しむばかりです。

今からちょうど 10 年前の 2016 年 6 月、会報 No.157 にご寄稿くださった先生は、「互いを知ることが最も大切」と題して、その最後の段落以下のように述べておいでになります。

「最近の日中関係は誠に悲しい状態である。政府間ほど冷えても、人民と政府はおなじではない。太平洋戦争中我々も惑わされた教訓を生かし日本人も中国人も、宣伝や教育に惑わされないよう、冷え切ったときこそ、相互交流を盛んにし、互いに直接知ることが最も大切である。」（以下略）

今日の日中関係は先生が慨嘆された 10 年前に比べて更に百倍・千倍もと言いたい程、悪くなっています。政府間の対立と大多数の「惑わされた」国民が抱く対立感情・敵対意識が共鳴するという、100 年前と似た状態です。この現状を先生はどのようにご覧になっておいででしょうか。今となっては同術もありませんが、このような時こそ、当に先生が述べておいでのように、両国民の一人一人が相手を正しく知ることを通じて互いに嫌いあい憎みあうという悪しき関係を断ち、両国間の緊張を和らげ、政府間の対話を促すことが必要ではないでしょうか。

当協会には先輩方が半世紀こわたって営々と積み重ねられた日中学术交流の実績があります。この貴重な財産を生かして日中関係の修復に努めることこそ、坂部先生の御遺志に沿う途ではないでしょうか。

# 一般社団法人日中科学技術交流協会 中国人留学生研究奨励賞 募集のご案内

選考委員長：須賀唯知、副委員長：藤田豊久

日中科学技術交流協会では、将来の日中両国間の科学技術協力を担う若手研究者を奨励することを目的として、中国人留学生を対象とした「研究奨励賞」を設けております。

当協会は1977年12月、戦後の日中学术交流の再興に尽力された日本学術会議の有志を中心に設立されました。その原点は、1950年代半ばに遡り、国交回復以前から両国の学術的絆を築こうとされた先達の熱意と努力にあります。以来半世紀近くにわたり、日中間の友好と相互理解の促進に努めてまいりました。

この奨励賞は、東京大学名誉教授であり原子核理論の研究者として著名であった故・野上茂吉郎先生のご遺族からのご寄付を契機に、1987年度より設けられたものです。当時、経済的に厳しい環境下で研究に励む中国人留学生を支援するための願望制度として発足し、以後、諸先生、企業、会員の皆様からのご寄付により支えられながら、継続的に運営されております。

本賞は、単なる研究奨励の枠を超え、日中両国の長い学术交流の歴史と、それを支えてこられた多くの方々の志を受け継ぐものであります。これまでの受賞者は150名を超え、各分野で活躍を広げております。

つきましては、貴研究室においてご指導中の中国人留学生の中に、本賞の趣旨にふさわしい方がおられましたら、ぜひご推薦をご検討賜りますようお願い申し上げます。

一般社団法人 日中科学技術交流協会  
代表理事・会長 山脇道夫

## 募集要項

下記の要領により中国人留学生研究奨励賞の受賞候補者を募集します。応募者の中から、選考委員会が3名以内の受賞者を選出し、研究奨励賞を授与します。

1. 研究奨励賞の内容：賞状および副賞10万円を受賞者に授与します。

## 2. 応募資格

日本の大学・研究所等に在籍する中国国籍の留学生で、博士学位請求論文に相当する水準もしくはそれ以上の水準の研究を行い、日本国内または国外の学会において2回以上の口頭発表を行い、それらを1篇以上の学術論文として公表（印刷中を含む）している者、あるいは、日本の大学・研究所等に在籍、博士学位を取得し、応募締切日において学位取得後2年以内である中国国籍の留学生を対象とします。いずれも、博士学位請求論文の主たる指導教員、および同じ研究分野の研究者1名の推薦が必要です。なお、本研究奨励賞は、本協会会員有志からのご寄付を原資とするもので、研究分野は特定しておりません。

## 3. 募集期間：2026年7月1日～9月30日

## 4. 授賞式：2027年1月8日(金)

## 5. 応募方法

下記の応募書類をWord、Excel、PDFそれぞれのファイル形式のものをZIP形式にまとめて、電子メールで下記まで送付してください。

※受信後、受付番号をお知らせいたしますので必ずご確認いただき、未着の場合は締切日までに必ずお問い合わせください。

応募書類送信先：Email：[award@icstea.jp](mailto:award@icstea.jp)

応募書類の容量が10MBを超えますと、受け取れない場合があります。お手数ですが、<https://file-post.net/>などのファイル転送サービスをご利用ください。

## 応募書類

- ①申請書：別添Excel
- ②居民身分証コピーPDF
- ③業績要約：和文で20文字以内の標題を付し、2000字以内にWordでまとめること。

また、本賞は日中科学技術交流の促進に寄与する人材を顕彰することを目的の一つとしているため、研究成果を踏まえ、将来の日中科学技術交流の発展にどのように貢献したいかについての考えを400字程度で付記すること。

④業績書：査読の有無を明記した論文リスト、その他（著書、データベース、オープンソース、特許等）のリストWord

⑤主要な論文3篇のPDF

⑥推薦書（指導教員）A4一枚以内、任意フォーマットPDF

⑦推薦書（推薦者）A4一枚以内、任意フォーマットPDF

## 6. 選考方法

本協会の選考委員会にて選考を行い、2026年（令和8年）12月までに応募者に採否を通知します。なお、選考にあたっては、研究業績および将来性に加え、研究活動を通じた日中科学技術交流への貢献の可能性を総合的に評価します。

※ご提出いただいた申請書類はご返却いたしませんのでご了承ください。

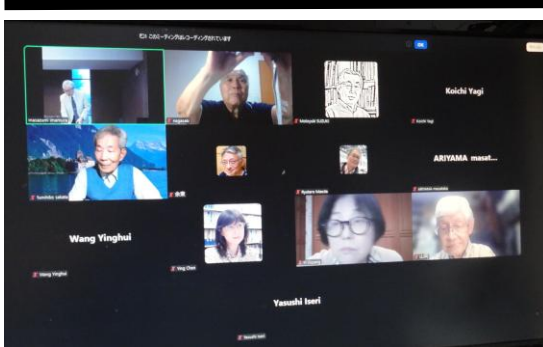
※申請書に入力された個人情報、助成以外の目的には使用いたしません。

## 7. 受賞者の義務

受賞者は授賞式で授賞への答辞および研究発表を行い、研究概要を日本語で本協会会報に投稿していただきます。また、本協会の学生会員あるいは協力会員にも登録して頂きます。

2026年度 研究奨励賞申請書												
申請日		2026	年	月	日							
申請者	氏名（漢字）								性別	男		
	氏名（英字）											
	生年月日	19	年	月	日			（満	歳）			
	出身地（漢字）											
	来日年月日		年	月	日							
	現住所											
	電話（携帯）					E-mail						
	所属機関											
	専攻／部署							学年／職名				
	学位論文／研究題目											
	学位授与機関							学位名				
	学位取得(見込)日		年	月	日							
	学歴（高等学校以降）											
職歴												
指導教員	指導教員氏名											
	所属機関											
	専攻／部署							職名				
	電話					E-mail						
推薦者	推薦者氏名											
	応募者との関係											
	所属機関											
	専攻／部署							職名				
電話					E-mail							

## 第7回 定時社員総会 6月20日 於：東大伊藤国際学術研究センター



### 1. 2025年度事業報告と決算を承認

収入80万円（会費39万、寄付41万）  
支出90万円（交流4万、講演2万円、会報3万、奨励賞41万、管理費40万）  
収支差額 -10万円 前年度繰越60万円  
差額剰財産50万円（現金3万、預金47万）

### 2. 2026年度事業計画及び予算について承認

収入80万円（前年同）  
支出88万円（講演12万円、会報2万、奨励賞38万、管理費35万）  
収支差額 -8万円 前年度繰越50万円  
差額正味財産43万円

### 3. 50周年記念事業の進め方を了承

**原点：**1972年田中角栄と周恩来の国交回復  
1973年有山兼孝教授と郭沫若院長等の人民大会堂での日中学术交流の話し合い

**1977年12月17日協会発足** 以後50年交流

**記念事業：2027年12月18日（土）** 80~100名参加  
於 日中友好会館大ホール

14:00~17:00 シンポ ロボテックス領域等

17:00~17:30 留学生研究奨励賞授賞式

18:00~ 懇親会

記念誌発行：会報50年間記事の整理掲載

中国科学研究機関の記事

中国大使館や日中交流機関への協力依頼

### 4. 協会入会選考基準の理事会制定が報告された。

### 5. 以下の講演会が実施された

講演1：「日中連携による自然共生型水環境修復技術の開発」

協会正会員 温州大学特聘教授 井芹寧 先生

講演2：「日中科学技術交流への郭沫若初代科学院院長の想い」

協会理事 茨城大学名誉教授 坂田文彦 先生

## 会費とご寄付納付の御礼

2026年度会費とご寄付のご納入が以下の方から45万円ありました。ありがとうございました。

### 会費納入 15名 各1万円 計15万円

①山脇氏、②井芹氏、③林氏、④山田周平氏、  
⑤欧陽氏、⑥八木氏、⑦山岡氏、⑧福田氏、⑨梶谷氏、  
⑩坂田氏、⑪王婷氏、⑫永崎氏、⑬余氏、⑭有山氏、  
⑮王英輝氏

### ご寄付 10名 30万円

①山脇氏5万円、②林氏1万円、③山田周平氏3万円、  
④欧陽氏9万円、⑤八木氏2万円、⑥福田氏1万円、  
⑦梶谷氏1万円、⑧永崎氏4万円、⑨余氏2万円、  
⑩有山氏2万円、

### 会費未納の方は下記にご納付をお願いします。

正会員会費 年額1万円

ご寄付 1万円より

振込先

普通預金 みずび銀行横山町支店

店番040 口座番号3015881

日中科学技術交流協会

## 目次

1. 日中科学技術交流への郭沫若初代中国科学院院長の想いー 日中国交回復を祝し、沁園春の詞牌に心を込めて謳う

日中科学技術交流協会理事 坂田文彦 1

2. 「日中連携による自然共生型水環境修復技術の開発」

協会正会員 温州大学特聘教授 井芹寧 4

3. 坂部知平先生を偲んで

有山正孝 6

4. 中国人留学生研究奨励賞募集のご案内

選考委員長：須賀唯知、

副委員長：藤田豊久 8

5. 総会 10

6. 会費と寄付納付の御礼 10